現代中国農村の生活空間

——江蘇省六合県のばあい——

小島泰雄

【要約】 生活空間の重層性に着目しつつ、現代中国農村における生活空間と社会生活の相互関係の一端の解明を目的とした、農村調査に基づく実態的検討が本稿では行われる。中国農村研究の有力な分析枠のひとつであるスキナーの市場社会概念の再考も本稿の射程の一部を構成する。二八戸の調査村は小村的集落形態をもつ雑姓村であり、村民小組として生産隊の領域性を継承している。生業としての農業において、生産責任制導入以降の強固な家族経営のもつ個別性に対して、村民小組レベルに確認される村落は、その生活と生産の二重の近接性に支持され、家族経営の補完的機能を微弱ながらも果たしている。また生産・生活の多段階に農民と集市・集鎮との経済的関係が見られ、その範域である市場圏の特徴として大規模性と不均質性が指摘される。婚姻をめぐる検討からは、村落が外婚単位的傾向を示すこと、市場圏は調査村の通婚圏を内包するがその婚姻の過程には市場社会概念的な原理は認められないことなどが明らかとなった。

史林　七四巻三号　一九九一年五月

はじめに

スキナーの四川省をフィールドとした研究①は、地理学では、その整形された正六角形モデル②に代表されるように、定期市・中心地研究の古典として知られる。そして、同じこの研究において提示された市場社会（Marketing Community）概念③は、以後の中国農村研究に大きな影響を与えている。

スキナーは市場町を三階層に分け、その最下層の基層市場町の取引範囲である市場圏を社会単位とみなし、市場社会と

呼んだ。この市場社会概念は、二つの認識に基づいて導出されたと考えられる。スキナーは、五〇歳までに三〇〇〇回と象徴的に示された、農民の定期市への参集頻度の高さによって、市場圏全域に定期市での交流を媒介とした農民の面識がひろがると考え、市場圏全域に関する農民の等質的な認知地図を想定する。そしてこの面識に基づいて、市場圏を範域とした、婚姻などの社会関係が発生し、宗族や秘密結社などの社会組織が形成されるとする。[4] もうひとつの認識は、市場圏を文化単位と見なすものであり、度量衡・民間伝承・言葉などの文化項目において、市場圏間に差異が存在するとしている。[5]

市場社会概念の導出過程について、もう一点注目すべきことは、村落と市場圏の評価である。経済的関係のみならず社会的関係までも村落の枠を越えて発生しているという観察に基づいて、スキナーは、従来の中国農村の人類学的研究が、単一村落内での研究に終始するコミュニティ・スタディ的限界を持っていた点を指摘する。その一方で、村落を越えて発生した諸関係のほとんどは市場圏内に完結すると想定している。すなわち、スキナーは社会・経済的関係における村落の開放性と市場圏の閉鎖性を相対的に捉えたうえで、市場社会概念を提示したわけである。[6]

こうした市場社会概念は、新たな分析の枠組としてスキナー以後の研究に多大の影響を与えており、その意味で画期的なものであった。ナップの台湾北部農村における研究は、スキナー以後の研究状況を端的に表したものと言えるであろう。[7] この研究は台湾農村社会における社会経済的「基礎単位」[8]を明らかにすることを目的として、生産物販売や消費財購入などの経済活動と、宗教や婚姻などの社会関係の分析形態を実態的に検討した興味深いモノグラフである。しかし、その分析に際しては、その出発点から市場圏的空間スケールが採用されており、「基礎単位」を明らかにするというその目的にもかかわらず、村落は考察の対象外に置かれている。このナップの研究に見られるような、村落の軽視と呼び得る観点は、市場社会概念の受容過程に共通して認められる。

日本においては、スキナーの市場社会概念の受容は、主に歴史学の分野において進められてきた。[9] これらの歴史学的研

究の主眼は封建的社会構造の解明にあるわけであるが、[10]ここでは本稿の採用した生活空間研究の視点から、日本における市場社会概念の導入前後の研究状況を簡単に振り返っておきたい。

日中戦争期に行われた農村実態調査[11]によって、中国農村における村落共同体の存在は否定されたとされる。[12]福武直はこの存在を否定された村落共同体を、土地共有制的、血縁的、孤立小宇宙的という、三種類の共同体にまとめている。[13]中国農村を理解するための仮説として提示されたこれらの共同体概念は、いずれも反証の提示による実証的否定を受けたわけであるが、その際、農民の生産・生活レベルにおける村落の機能については、ほとんど検討されないままであった。[14]したがって、生活空間としての村落に関して市場社会概念の導入以前に明らかとなっていたことは、農民の相互関係の少なからざる部分が村落を超出して発生していることと、村落の共同体的機能が一般に微弱であったことの二点に集約されよう。

村落共同体の存在の否定が否定に止まり、代替的な準拠枠を生み出し得なかった点が、一九七〇年前後の市場圏論[15]の登場に一定の前提を与えていたと考えられる。スキナーの市場社会概念の影響下に展開された市場圏論は、中国農村に関する村落共同体的理解に代わるものとして、地主制的支配との関連から理論的に展開されたものであり、市場圏を中国農村における社会・経済的に最も重要な範域とする認識を共有している。しかし、市場圏に関しては、通婚圏[16]や祭祀圏[17]との分布的対応が文献的に検討されているものの、その実態的研究は経済圏的側面を含めて、全く手薄な状態に止まっていると言わざるを得ない。すなわち市場社会概念について、スキナー以降、実証的研究はほとんど行われていないのが現状である。

「社会生活のいとなまれる空間的基盤[18]」である生活空間は、本質的に重層性を持つものである。伝統的な日本農村においては、村落が基礎地域[19]として、重層的な生活空間の中で極めて強い機能を有していた。それゆえ日本農村を対象とした生活空間研究は村落を考察の中心に置いて進められて来たと言えよう。[20]そうした生活空間研究の課題は、社会生活と生活空間の相互関係の解明にあると考えられる。すなわち、生活空間研究は社会生活の空間的ひろがりの特性を明らかにする

と同時に、生活空間の社会生活への作用構造を解読することを目的としている。

上述の研究状況の展望に明らかなように、中国農村の生活空間の存在形態は、日本農村に見られるような、村落に社会生活の諸機能が集中してゆく性格のものとは異なると考えられる。しかし、この日本における村落を市場圏に置き換えて考えれば中国農村の生活空間を語り得ると考えるには、我々の掌中にある情報、すなわち研究の蓄積はあまりにも不十分と言わざるを得ない。本稿の目的は、中国農村における生活空間と農民の生産・生活との相互関係の解明をめざし、その端緒となるべき実態的検討を行うことにある。

本来、重層的である生活空間の分析に際して、上述の展望から自ずと導かれるように、村落と市場圏を中国農村において何らかの機能を有する生活空間として仮説的に設定することが可能である。このふたつの生活空間を複眼的に扱う試みは、早く福武直によって「町村共同体」として行われている。[21] スキナーの市場社会概念には都鄙共同体的な発想を見いだすことができるが、[22] 都鄙共同体自体は、サービス機能を中心とした、農家と地方中心地の直接的な結び付きが重要な役割を果たしている合衆国の農村[23]におけるモデルである。生産・生活を個別経営体レベルで完結し得ない小農的性格の強い中国農村に、この都鄙共同体を直訳的に適用することの不完全性は、すでに福武によっても指摘されるところであった。それと同時に福武は、自ら行った華中農村の実態調査に基づいて、村落に集団累積性を認めた上で、農民と地方中心地との経済的関係をも視野に収めた町村共同体概念を提出したのである。残念ながら、提示者自身によっても、実証的展開を含めて、研究を深められることのなかった点でこの町村共同体概念は市場社会概念と類似しているが、これらの先行研究に学びつつ、以下、江蘇省六合県でのフィールドワーク[24]に基づいて、中国農村の生活空間の考察を進めて行きたい。

① G. W. Skinner, Marketing and Social Structure in Rural China, *The Journal of Asian Studies*, vol. 24, 1964（邦訳：今井清一他訳『中国農村の市場・社会構造』法律文化社、一九七七）

② モデル化の問題点については、応地利明「デカン高原南端部における定期市の規範的検討」（『人文地理』三八―四、一九八六）特に三〇七―三〇八頁参照。また、モデル化以前の定期市の分布把握の現実との乖離についての報告として、Jiang Hongling, Distributions of Central Places Nearby Chengdu in Southwest China, I. G. U.

Regional Conference Beijing, 1990.

③ Skinner, op. cit., p. 32.

④ *ibid.*, pp. 33-39.

⑤ *ibid.*, pp. 39-40.

⑥ 開放性・閉鎖性は「社会の分析解明の出発点ないし根底となるべきものである」。臼井二尚「日本村落の封鎖性と開放性」（『京都大学文学部研究紀要』五、一九五九）一頁。

⑦ Ronald G. Knapp, Marketing and Social Patterns in Rural Taiwan, *Annals of the Association of American Geographers*. 61-1, 1971, pp. 131-155.

⑧ *ibid.*, p. 132.

⑨ スキナーの一九六四年論文の早期の紹介としては、斯波義信の書評（『東洋学報』四九―二、一九六六、九九―一一五頁）が挙げられよう。

⑩ 歴史学研究の展望として、内山雅生「華北農村社会研究の成果と課題」（『駿台史学』四〇、一九七七）

⑪ 東北、華北、華中の農村で行われた実態調査のなかで、華北農村について法社会学的な方法論の下に進められた慣行調査はその代表とされる。『中国農村慣行調査』（全六巻、岩波書店、一九五二―五八）

⑫ 旗田巍『中国村落と共同体理論』（岩波書店、一九七三）

⑬ 福武直『中国農村社会の構造』（福武直著作集 九、東京大学出版会、一九七六）二五六―二五九頁、ただし初出は一九四六年

⑭ この点に関して共同体論の立場から、市場圏論への批判として、再生産媒介の物質的条件の究明が求められている。田中正俊「中国―経済史」（『アジア経済』一九―一・二、一九七八、四五頁）また、八十年代に入って、日中戦争期の資料を利用した、村落の共同体的性格の再考：石田浩『中国農村社会経済構造の研究』（晃洋書房、一九八六）や、村民間の共同関係の再考：内山雅生「近代華北農村社会における共同関係についての一考察」（『金沢大学経済学部論集』三―一、一九八二）が開始されている。

⑮ 市場圏論としては、河地重蔵『毛沢東と現代中国』（ミネルヴァ書房、一九七二、一三〇―一五〇頁、ただし初出は一九六七年）および、古島和雄『中国近代社会史研究』（研文出版、一九八二、三―三三頁、ただし初出は一九七二年）が挙げられよう。

⑯ 石田浩「旧中国農村における市場圏と通婚圏」（『史林』六三―五、一九八〇）

⑰ 中村哲夫「清末華北における市場圏と宗教圏」（『社会経済史学』四〇―三、一九七四）

⑱ 水津一朗『社会地理学の基本問題（新訂増補）』（大明堂、一九八〇）三一頁

⑲ 同書、一四頁

⑳ 簡潔な研究展望として、浜谷正人『日本村落の社会地理』（古今書院、一九八八）

㉑ 福武直、前掲書（一九七六）二六一頁

㉒ 斯波義信の前掲書評（一九六六、九九頁）も市場社会と都鄙共同体の近似性を述べている。

㉓ アメリカ合衆国の農村と東アジアの農村との比較について述べたものとして、今村奈良臣『揺れうごく家族農業』（柏書房、一九八六）

㉔ 現地調査は、一九八八年から一九九〇年にかけて、四回、計二週間あまり実施された。

一　調査地の概況

(1) 位置

地域分化の検討が地理学の伝統的課題であることに示されるように、調査地の地域性の理解を抜きにして、中国農村における一般化を求めることはできない。近年、中国において南北・東西の地域格差が拡大しつつあるとされる。[1] こうした地域格差は経済的発達状況の地域間の差異として最も明瞭に表れるものであることから、ここでは、調査地の属する江蘇省六合県の中国における位置付けを、農民収入を通して検討する。

一九八八年[2]の農民一人あたり純収入[3]についてみると、その全国平均は五四五元となっている。江蘇省平均は七九七元で、三直轄市、浙江省、広東省に次いで全国第六位である。この数字からもわかるように、一九八五年以来全国第一位の工業総生産額を誇る江蘇省[4]は、その農村地域においても中国における経済的な先進地域を形成している。

続いて江蘇省内部における地域分化の検討を通して、六合県の位置付けを考察するために、農民収入の県別データ[5]を取り上げる（図一）。六合県の平均農民収入は六九四元で、江蘇省においてはほぼ中位の経済水準にある。江蘇省の農村経済の類型化研究でも、四段階に分けられた経済的水準において、六合県は第三段階に位置している。[6] 江蘇省の農村経済の地域分化としては、図一から明瞭に読み取れるように、大きな南北差が存在する。省南部における農民収入の高さは、主に郷鎮企業の発達に伴う非農業収入の多さによるものである。[7] 江蘇省の農村地域において、総生産額に占める農業以外の生産額の割合[8]は、無錫・常州・蘇州の南部先進地域では八〇％台であるのに対して、徐州・塩城の北部後発地域では五〇％に満たない。六合県のそれは五二％である。したがって江蘇省における六合県の産業構造の性格として、工業の発達が不十分で、依然として農業が重要な位置を占めているという経済状況を描くことが可能であろう。

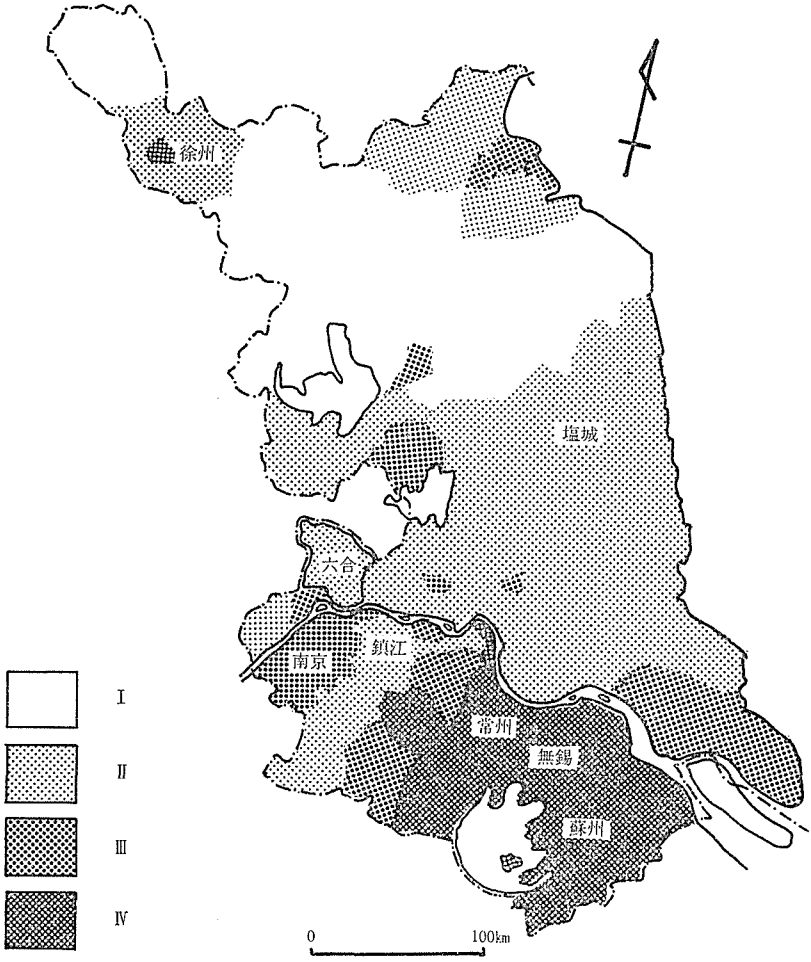

図１　江蘇省の農民収入分布

Ⅰ：～600元　Ⅱ：600～800元　Ⅲ：800～1000元　Ⅳ：1000元～

(2) 概観

調査地は行政上、竹鎮鎮兆璧村に属する。[9] 竹鎮鎮の中心集落である竹鎮集鎮は、六合県城の西北二四㎞にあり、県西北部の重要な集鎮（地方町）である。[10] 竹鎮鎮の総人口は二〇八九八人、うち二七三六人が集鎮人口である。農村地域は一四の行政村によって構成され、兆璧村はそのひとつである。農村地域の労働力として、九〇三六人が登録されており、その四分の三の七〇三〇人が農業労働力とされる。

竹鎮鎮は農業地域区分上、「鎮寧揚丘陵農業区」に属する。この農業地域においては、一般に、農民一人あたり耕地が江蘇省内では比較的広く、水稲・小麦の二毛作を中心とした穀物生産が行われているとされる。[11] 竹鎮鎮における耕地面積に対する播種面積の比率を見ると、夏作は九四%が水稲であり、冬作は六九%が小麦、一八%が油菜である。水稲については、一九七六年以降、多収量のハイブリッド米が導入されており、既に三回の品種の更新が行われ、現在「汕優六三」がほとんどの水田で栽培されている。

農業以外の産業としては、羽毛加工、食品冷凍加工など産地立地型の工場をはじめとした鎮営企業が、合計一五七七人の労働者を擁している。郷鎮企業としては、鎮営の他に、村営と個人経営・聯営の企業があり、生産額では村営以下の企業が全体の四分の一を占めている。工業以外の郷鎮企業としては、生産額に占める構成比は小さくなるが、建築業・運輸業・商業などの主として地域内サービスを目的としたものが見られる。

兆璧村は、竹鎮集鎮の西およそ二㎞に位置し、地形的には耿跳河の支流沿いの低平地と、それを囲むかたちで広がる、標高差二〇mほどの丘陵地によって構成されている。耕地の有効灌漑面積比率は七四%で、電力ポンプによる灌漑が、人民公社時期に整備された水路を利用して行われている。

兆璧村の戸数は三四一戸、人口は一二六九人である。人民公社時期の生産大隊の範域をそのまま引き継いだ村域には、一一の村民小組がある。六七二の労働力の大部分（七九%）は農業労働力であり、このほか工業（六%）、建築業[12]（一一%）な

どの労働力が登録されている。

重点的な調査は、兆璧村の南部に位置する沙子崗で実施された。沙子崗は一一の村民小組のひとつである。沙子崗はその名のとおり砂質の、西南からのびた丘陵の先端に集落が立地しており、その周辺に耕地が広がっている。景観的には、小村的集落形態を呈している。一九八九年四月には、戸数が二八戸、人口は一一七人、うち女性が五七人であった。労働に従事している八〇人のうち、一七人が常年の農業以外の労働を行っている。このうち郷鎮企業に勤める者は九人である。主として農業に従事している六三人のうち、男性労働力の多くは[13]農閑期に建築業をはじめとした農業以外の労働を行っている。

沙子崗は、清朝末期に王姓がここに居を定めたことにその集落史は始まるとされる。[14]現在、沙子崗にはその王姓（六家族二一人）のほか、侯姓（九家族三四人）、周姓（五家族二四人）の比較的大きな宗族と、余姓・戴姓（各二家族）、卞姓・夏姓・陳姓・趙姓（各一家族）が住んでおり、雑姓村落を構成している。

（3）村民小組・生産隊・自然村・集落

村民小組・生産隊・自然村・集落について、その概念的整理と四者間の関係の明確化が本節の目的である。これらのうち集落を除く三者は、いずれも中国において一般的に用いられている言葉である。まず自然村と村民小組について用語的な解説を行う。

中国農村で一般的に用いられている自然村は、日本において付与されているような社会学的概念、すなわち集団累積体であり、かつ住民意識の社会的統一体であるという意味内容[15]を持たない。実態としては、景観的概念としての集落と同義に用いられている場合が多い。

村民小組は、行政単位として位置付けられてはいないが、行政村の下位にあって、末端行政補完的な機能を持ち、居住

地域に従った自動的加入による住民組織である。人民公社の解体時に設定されたもので、[16] 枠組みとしては、人民公社下の生産隊を引き継ぐかたちとなっている。

次に、集落・自然村と村民小組・生産隊との空間的な対応関係を検討する。表一は竹鎮鎮域(当時は竹鎮人民公社)の一四行政村(当時は生産大隊)ごとに、自然村と生産隊の数量的対応を表したものである。[17] 一自然村あたりの生産隊数は、竹鎮鎮域の平均で一・一四、行政村ごとの数値は〇・八から一・七であるが、その多くは平均値の前後に集中しており分散度は低い。このことから、竹鎮鎮域の自然村と生産隊とは、一対一対応を示すものが多いことが想定される。この対応をより具体的に検討するために、兆璧村における自然村と村民小組の対応関係を表したのが表二である。自然村と村民小組が一対一対応を示すものが五組、一対二対応を示すものが三組となっている。調査地域の集落には二十数戸からなる小村的傾向を示す集村が多く、そうした小村的集落は一般に一集落一村民小組となっている。やや規模の大きな集落が、分割されて

表1　竹鎮鎮域の自然村と生産隊の対応関係

大隊名	自然村数 (A)	生産隊数 (B)	比　率 (B/A)
元　農	11	15	1.4
豊　楽	19	20	1.1
宝　貢	7	12	1.7
白　羊	9	13	1.4
東　傅	9	7	0.8
金　磁	12	12	1.0
龍　山	9	9	1.0
双　龍	9	9	1.0
季　山	7	7	1.0
楊　雲	7	8	1.1
兆　璧	8	11	1.4
竹　林	8	9	1.1
頭　橋	8	9	1.1
八　里	10	11	1.1
平　均	9.5	10.9	1.14

表2　兆璧村における自然村と村民小組の対応関係

自然村名	村民小組名	戸数(戸)	人口(人)
羊山頭	羊　山	50	181
三和庄	東　河	27	109
	西　河	30	111
井二王	井二王	27	100
大壩口	大壩口	33	134
沙子崗	沙子崗	29	120
余　庄	南　余	20	78
	北　余	22	83
西　姚	西　姚	55	174
大果王	東　果	22	79
	西　果	25	96

村民小組の戸数・人口は1988年のデータ

二村民小組になっている。また、兆璧村において二村民小組からなる集落、三和庄・余庄・大果王はいずれも人民公社時期に分割され、二生産隊になっていたものである。以上から、四者間には、空間的に、〈村民小組＝生産隊≦自然村＝集落〉という関係が成立していることがわかる。

① 国家統計局農村調査総隊『中国農民収入研究』（山西人民出版社、一九八七）七頁

② 本稿では、統計データは、以後特に断らない限り、一九八八年のものを利用する。

③ 『中国農村統計年鑑　一九八九』（中国統計出版社、一九八九）二二五頁、三四三頁、データの年次は一九八八年。なお、純収入とは、総収入から生産性支出と税金などを差し引いたものである。

④ 顧松年ほか編『江蘇経済十年縦論　一九七八―一九八八』（南京出版社、一九八九）六―七頁

⑤ 江蘇省統計局編『江蘇省市県経済　一九八九』（中国統計出版社、一九八九）三六三―三六九頁、データ年次は一九八八年。ただし、明らかな記載ミスと考えられる、射陽・建湖・大豊の三県については、総収入と高い相関（当該県を含む塩城市轄区において、相関係数〇・九二）を示す農民一人あたり農村社会総生産額によって修正した。

⑥ 曾尊固・陸誠「江蘇省郷村経済類型的初歩分析」（『地理研究』八―三、一九八九）八〇―八三頁

⑦ 前掲『中国農民収入研究』二〇〇頁

⑧ 前掲『江蘇省市県経済　一九八九』二九一―二九七頁

⑨ 中国の一般的な行政系統は、県―郷・鎮―村となっている。郷と鎮の区別は、中心集落の非農業人口比率によって決定される。竹鎮鎮は、一九八八年に郷から鎮に変更されている。

⑩ 『中華人民共和国地名詞典　江蘇省』（商務印書館、一九八六）三五頁

⑪ 金其銘ほか編『江蘇省地理』（江蘇教育出版社、一九八六）二四四―二四六頁

⑫ 生産責任制以後、家屋の新・改築に対する農民の意欲が高く、既にほとんどの農家はレンガ建瓦葺になっており、竹鎮鎮域では五％前後が二階建てになっているとされる。労働力に占める建築業に従事するものの多さは、こうした状況を背景に形成されたと考えられる。

⑬ 沙子崗の二八戸のうち一五戸を任意にサンプリングして、重点的聞き取りを行っているが、この一五戸のうち構成員がひとりも農業外労働を行っていない農家は三戸に過ぎない。

⑭ 六合県地名委員会編『六合県地名録』（一九八三）兆璧村では三和庄、羊山頭の二集落も同じ清末の成立とされる。

⑮ 鈴木栄太郎『日本農村社会学原理』（『鈴木栄太郎著作集Ⅰ・Ⅱ』、未来社、一九六八）

⑯ 王貴寝編『中国農村経済学』（中国人民大学出版社、一九八八年）三五頁

⑰ 前掲『六合県地名録』による。

二　構造契機ごとの分析

生活空間の重層性は社会生活の諸局面における多様な空間的ひろがりを前提としていると考えられる。本章では、生活空間と社会生活の相互関係を、農業生産という農民の直接生産過程、集市に代表される流通経済と農民との関係、そして婚姻に関する社会関係の三つの局面から考察する。

(1)　農業をめぐる空間

農民の生活における農業のもつ意味を、農家経済に占める農業収入を検討することから考えてみたい。六合県の一九八八年農家基本状況調査[1]によると、総収入の八五%は家族経営による収入が占めている。その家族経営の内訳は、農業収入が四三%、豚・鶏などの家畜生産による収入が四二%となっている。また農業収入の七四%は、米・小麦などの穀物生産による収入である。したがって当地域の農家経済は、家族経営による、穀物生産を中心とした農作物生産と家畜生産とに大きく依存していると言えよう。[2]

この生業としての農業において、労働の投下や資源の循環などは、耕地を中心に展開されている。まずその耕地の所有・経営について検討してゆく。

中国農村においては、土地公有制の下、耕地は集団所有されており、[3]調査地域では、人民公社時期に耕地の所有主体とされた生産隊を引き継いだ村民小組が所有主体となっている。村民小組の所有耕地には明確な境界が存在し、[4]その分布は一円的である。沙子崗では、耕地は集落を囲むように広がっている（図二）。また沙子崗の隣接集落の大果王には二つの村民小組、東果・西果があるが、その所有耕地は、東果が集落付近に、西果は遠方ながら耕地条件のよい集落南方に、それぞれ一円的に分布している。いずれの場合も村民小組レベルで、集落と耕地がセットとなった「村落」が存在しているこ

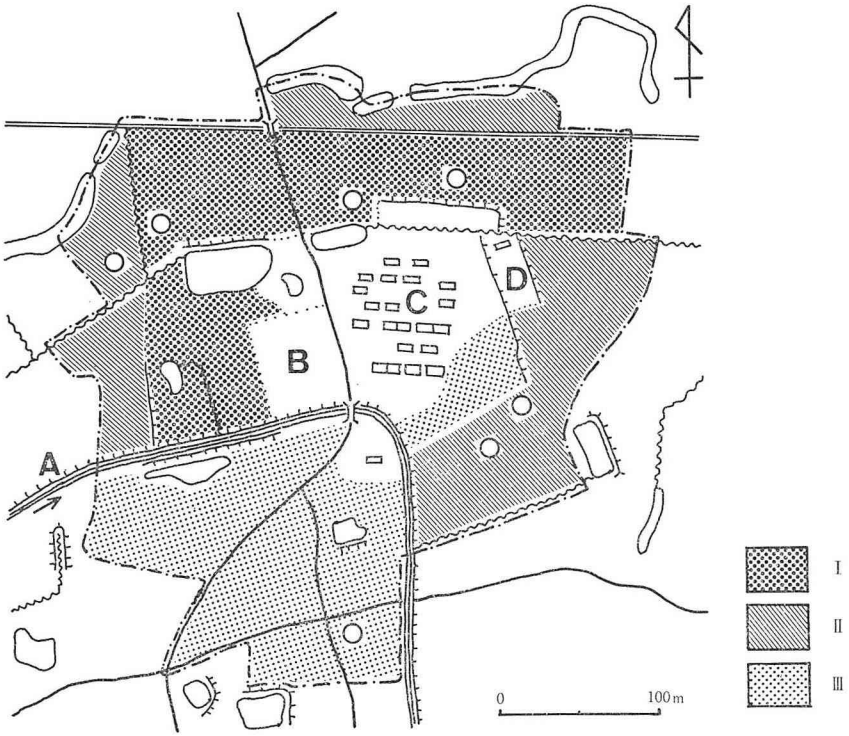

図2　沙子崗の集落と耕地

Ⅰ：良質耕地　Ⅱ：中質耕地　Ⅲ：劣質耕地
A：灌漑水路　B：自留地　C：集落　D：脱穀場
○印はある農家の経営耕地の分布を示す

とになる。[5] また、この村落が境界を明確に有すことから、村落には何らかの領域性が発生していると考えられる。[6]

続いて耕地の経営について見てみよう。生産責任制の導入[7]に伴って、農業経営の大部分が集団（生産隊）から個別農家に委ねられることになった。個別農家への経営権の移転は、耕地に関して、その所有主体である生産隊を単位として、耕地一筆ごとに行われている。沙子崗では、人口一人あたり八分、一労働力あたり三畝[8]という二つの基準[9]に基づいて、各農家ごとの耕地の配分がまず決められた。次いで生産隊の耕地を、低平地の良質地、丘陵斜面の中質地、灌漑水路より高所の劣質地の三種に評価分類したうえで、農家間の平等を図って、農家ごとに配分面積に応じた耕地がこの三種の耕地群に分散して割り当てられた。家族五人で二労働

力を有しているある農家は、上述の基準に従って一〇畝の経営耕地[10]を、良・中・劣の各耕地群の七カ所に分散して持つことになった（図二）。

こうして分配された経営耕地の請け負い期間は、一般に一五年以上とされている[11]。また、計画生産に従った生産請け負い部分以外は、作付作物の自主的な選択が可能となっている[12]。したがって、個別農家に強い経営権が発生していると見なすことができる。生産責任制下におけるこうした個別農家の強い経営権は、実際の農業生産過程においては、完結性の強い家族経営として現れてくる。耕地一筆ごとの作付作物の相違や、同一作物であっても耕地一筆ごとに成長差が見られること、農作業が一人から二、三人で行われる場合がほとんどであることなどは、家族経営の貫徹が景観的に観察される例である。また、各作期の農作業に関する聞き取りにおいても、ほとんどの生産過程において、労働力・生産手段が個別農家レベルで充足されている。

この強固な家族経営を可能にしているのは、狭小な経営耕地と伝統的な生産方式であると考えられる。農民一人あたりの耕地面積は、竹鎮鎮域で一・五八畝、沙子崗で一・七九畝である。この平均値に表された経営耕地の狭小さが、耕起・整地には耕牛を利用し、播種・移植・収穫などいずれの農作業も人力によって行われるという生産方式と結び付いて、自己完結性の強い家族経営を成立させている。調査地域では一般に一農家あたり二労働力を有す[13]が、この二労働力で十分な農業生産を行い得る限界を、竹鎮鎮の農業行政担当者は八畝から一〇畝とする。実際の一農家あたりの平均経営耕地面積は、竹鎮鎮域で六・〇四畝、沙子崗で七・六五畝であり、このことからも家族経営の完結性を窺うことができる。

しかし、この自己完結性の強い家族経営においても、農業生産の完全な自己充足は行い得ない。耕起・整地に用いられる耕牛[14]は、生産責任制（大包干）の導入時に、生産隊の所有であったものが農家に分配されている。現在、沙子崗には八頭の耕牛がいるが、それぞれ一から四家族によって所有されており[15]、耕牛を所有していない農家は、この八頭のいずれかを借りて農作業を行っている[16]。さらに農作業の特定されない過程で、沙子崗内での労働力の交換が見られる。ただし、こう

した生産手段の貸借や労働力の交換は一般に金銭を介したもので、日本の「ムラ」に見られた「ゆい」的な互助関係とは性格を異にすると考えられる。それでもなお家族経営の補完的機能が村落としての沙子崗において充足される傾向が存在することは、見逃せない意味をもつ。

農業生産が家族経営を中心に展開されて行く中で、規制・慣習という形をとって、村落が生産過程に直接介入している状況は、調査地においては観察されなかった[17]。その意味では、村落の領域性は実質的な統制の機能を欠いており、不完全なもの、あるいは微弱なものと言わざるを得ない。日本農村の生活空間と比較すると、農業に関して、村落の作用体としての機能が低いことは、現在の中国農村の生活空間の特徴のひとつであろう。それでは、生産手段の貸借や労働力の交換などの、家族経営を補完する機能が村落内で完結する傾向はどう位置づければよいのであろうか。この傾向は、小村的集落形態を示す居住様式と、分散錯圃的かつ一円的な耕地分布という、村落という生活・生産の場における、二重の近接性によって生み出されたものであると考えられる。そして、この二重の近接性こそ、生活空間としての村落の存在を支持するものである。新たに沙子崗に住むためには現在の住民全体の同意が必要とされ、実際に近年移ってきた三家族がいずれも住民との婚姻関係あるいは親族の紹介によって定住していることにも、村落レベルの近接性維持の志向を認めることができる。現代中国農村における村落は、生業たる農業に関して、村民小組レベルの、すなわち村落の領域性と家族経営の個別性の均衡という構図の中で理解可能なのではないだろうか。生産責任制の導入以降は、領域性の機能の低下、個別性の増大として把握されるものであると考えられる。

（2）集市をめぐる空間

調査地域における農民と商品経済との関係について、まず農家経済の検討[18]を通して考察する。近年、農作物の商品化の進展と各種労務的活動の増加によって、農民の現金収入が増大している[19]。六合県においては、総収入の七四％が現金収入

となっている。現金収入の五六%が農産物の売却による収入であり、その農産物収入の三五%が農作物の売却による、また六三%が家禽・家畜等の売却による収入である。建築業・運輸業などの労務性収入をはじめとした農業以外の収入は現金収入の一五%を、郷鎮企業からの収入は一二%を占めている。

次いで支出について見ると、現金支出は総支出の六八%を占めている。主として農業再生産に用いられる家族経営支出が現金支出の三三%、その家族経営支出の七八%は家畜生産に関わる支出である。生活消費支出は現金支出の四九%であり、その生活消費支出の三九%が食品、二五%が衣類・生活用品の支出となっている。前節で検討した農業についても、生産の前段階・後段階では深く商品経済と結び付いていることや、現金支出の半分が生活消費に振り向けられていることなどが、以上の農家経済の数値から理解される。以下、農民が如何なる空間的ひろがりのなかで、商品経済と交渉を持っているかについて検討を進めるにあたって、まず沙子崗の農民の商品経済との関係を、物品の売却・購入の両面から整理する。

農作物の売却は米が中心となっている。請け負い生産部分および自家消費部分を除いた米は、竹鎮集市[20]の糧食所に市場価格(議価)で売却されるものが多く、竹鎮集市において自由売買されるものはわずかである。竹鎮集市の主要取引商品のひとつである生鮮野菜について、沙子崗の農民には、売却する人、量ともに少ない。また商品作物として近年導入された西瓜は、売却に際して集市を介さず、買い付けにやって来る仲買人などに直接売却されている。売却目的で飼育される家畜・家禽としては、ブタ・ニワトリ・アヒル・ガチョウが見られる。各農家ごとに、舎飼のブタが二頭から三頭、ニワトリ等が十数羽から数十羽放し飼いにされているのが一般的な生産形態である。ブタは通常、一頭が春節などの際に自家消費され、残りの一、二頭が竹鎮集市で売却される。ニワトリ等とそれらの卵は、比較的頻度高く竹鎮集市において売却される。これらの農産物の売却に見られる特徴は竹鎮集市との結び付きの強さであろう。先述の西瓜の場合を除いては、村内での取引を含めて、竹鎮集市以外での売却は稀である。

続いて物品の購入についてまとめてみよう。購入される主な生産財としては、化学肥料・農薬・農業用ビニールが挙げられる。このうち化学肥料と農業用ビニールは、需要が供給を上回る状況にあり、計画供給が実施されている生産財である。実際には、政府による計画供給分だけでは不十分であり、不足分は竹鎮集鎮の供銷合作社の生産資料小売部で購入されている。[21] 農薬は計画供給の対象外で、これも竹鎮集鎮の供銷合作社で購入されている。また、家畜や家禽の幼苗は竹鎮集市にある幼苗の専門市場で購入される。

食品をはじめ衣類や日用品などの購入の特徴は、まとめ買いをせず、少量づつ頻度高く行われる点にある。こうした農民の購買行動は、農民と集市・集鎮との接触を密接にする点で重要である。一般に、食品は竹鎮集市において、衣類は竹鎮集鎮の個人経営（個体戸）の屋台や商店で、日用品は竹鎮集鎮の商店で購入されている。一部の雑貨が兆璧村の唯一の小商店[22]で購入されるほかは、生活財の竹鎮集市・集鎮以外での購入はほとんど見られない。[23]

このように、物品の売却・購入は、そのほとんどすべてが竹鎮集市・集鎮において行われている。[24] すなわち、生産・生活の多段階において、沙子崗の農民と竹鎮集市・集鎮との間で経済的関係が発生しているのである。沙子崗の農民の多くが、農繁期を除いて、市日ごとに徒歩あるいは自転車を使って竹鎮集市・集鎮に参集している。[25]

つづいて、農民と竹鎮集市・集鎮との関係を、集市の参集者の調査[26]に基づいて集計的に検討する。より具体的には、竹鎮集市の財の到達範囲である市場圏の範域の画定と、その分布特性の解明を目的とする。

竹鎮集市は陰暦の三・六・九のつく日に開催される九斎市である。[27] 集市は、竹鎮集鎮の西南にある常設の穀物・食品市場（一部に屋根つき、一一畝）を中心に催され、取引はこの常設市場周辺の道路上でも行われている。一九八八年の竹鎮集市の交易額は九三〇万元である。市日一日あたりの交易額は八・六万元となり、江蘇省の大中型農村集市の平均交易額の二・三万元[28]に比べてかなり多額である。統計上は畜産物と家畜の幼苗の交易額が大きいが、このほかに穀類、野菜類、水産品が主要な交易品となっている。

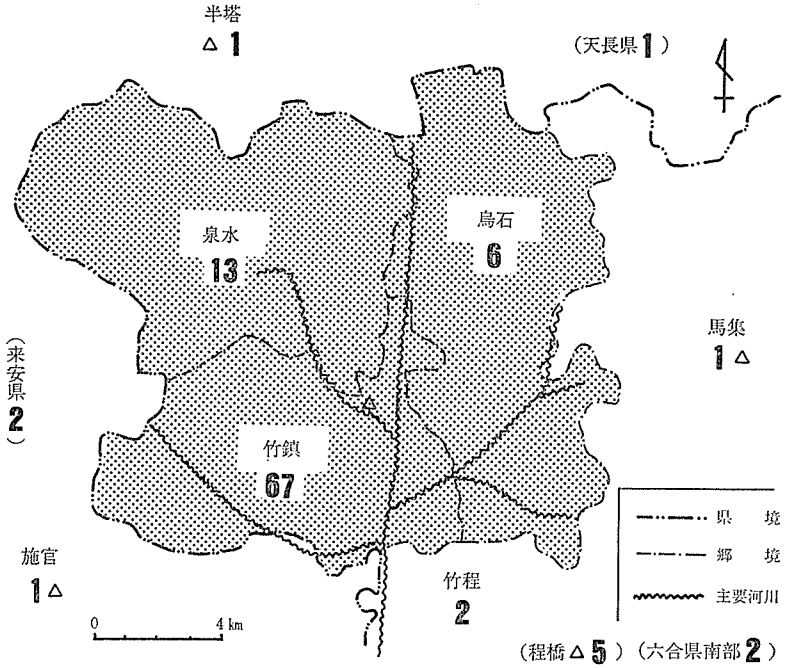

図3　竹鎮集市の参集者分布

△印は集市　　数値は構成比　　（　）内は位置を正しく表していない

参集者は平常時で一万人前後と推定されており、[29]春節前の最も人出の多い時期には二万から三万人が参集してくるとされる。参集者のほとんどが農民であり、販売者のほとんども、自ら生産した農産物やカゴ・ホウキなどの副業生産物を自ら売却しにきた農民である。集市が農民的取引の場であることはこの参集者の構成からも明らかであろう。利用交通手段としては、自転車、荷車とともにトラクターが重要な位置を占めており、[30]バスの利用はほとんど見られなかった。

竹鎮集市の付近には、馬集・程橋・施官・半塔の四つの集市が分布（図三）する。各集市の市日は、馬集が一・四・七、程橋が二・六・九、施官が二・五・八、半塔が一・四・七となっており、竹鎮集市の市日（三・六・九）と重複するものは程橋の二回のみであり、隣接集市間の市日調整の行われている可能性が看取される。[31]また、竹鎮鎮に隣接する泉水郷・烏石郷・竹程郷の各郷政府所在地には、主として野菜・肉類などの生鮮食品を売買す

る小規模な市が存在するが、いずれも定期市化していない。なお竹鎮鎮域には竹鎮集市以外の集市はない。図三には上述の四つの集市の分布とともに、参集者の調査によって得られたデータのうち参集者の居住地の分布を原則として郷単位に表したものである。後者の参集者の分布は、観点を転換すれば、集市で取引される財の到達範囲を表したものとも言える。この想定される財の到達範囲をもとに、前述の付近の集市分布、さらに集市管理部門での聞き取りの結果を参考にすると、竹鎮集市の市場圏は、竹鎮鎮・泉水郷・烏石郷の三行政地域に、竹程郷の一部と安徽省来安県の一部を含んだものとするのが妥当と考えられる。

こうして画定された竹鎮集市の市場圏の特徴としてまず挙げられるのは、その空間的、人口的規模の大きさである。竹鎮鎮・泉水郷・烏石郷の三行政地域のみで、面積は一九六km²、人口五八六七七人（一九八七年）に上る。世界的に見て定期市の市場圏の人口規模は一万人前後が多い[32]とされるのに比べると、竹鎮集市の市場圏規模の大きさが理解されよう。また、中国農村の定期市の市場圏について、スキナーはその標準的規模を人口七〇〇〇人あまり、半径四・五kmとした[33]。またスキナーは市場圏の規模は人口密度に対応すると考え、人口密度と市場圏規模の対応表を提示している[34]。その表によれば、上述の三行政地域の人口密度二九九人／km²に対応する市場圏の規模は、表の中では最も規模の大きな部類に属するが、それでも人口八八五〇人、面積二九・五km²である。こうしたスキナーの提示する市場圏規模と比較しても、竹鎮集市の市場圏の規模は明らかに大きい[35]。

参集者の分布に見られる特徴のひとつは、サンプルの六一％が竹鎮鎮域からの参集者によって占められていることである。こうした集市に近接した地域からの参集者の相対的多さは、竹鎮鎮域の行政村ごとの参集者の分布にも、近接村からの参集者の多さとして現れている（図四）。元農村は竹鎮集鎮の南に隣接する行政村であるが、野菜生産隊として販売目的の野菜生産が行われている。調査においても多くの元農村からの参集者が記録されており、竹鎮集市と近接地域との関係の強さを物語るひとつの例と考えられる。地域の経済的状況を表す指標のひとつである農民収入[36]の竹鎮鎮域における分布

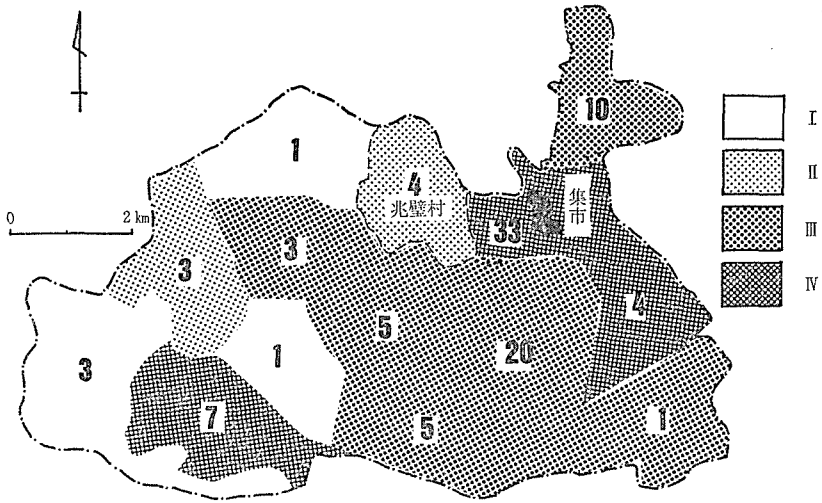

図4　竹鎮鎮域の農民収入分布と集市参集者分布

農民収入　Ⅰ：～400元　Ⅱ：400～450元　Ⅲ：450～500元　Ⅳ：500元～
数値は参集者の構成比

状況にも、竹鎮集鎮から離れるほど農民収入が減少する傾向を読み取ることができる（図四）。これらの状況は、現段階での竹鎮集市・集鎮が、近接地域に対しては強い影響を与えるが、市場圏内であっても集市・集鎮から離れるとその影響は弱まってしまう程度の作用しか持っていないことを表していると考えられる。経済的側面においても、竹鎮集市の市場圏はその内部に非等質的性格を有すと言えよう。

（3）婚姻をめぐる空間

前節において、農民と集市・集鎮との関係が、農民の経済的活動の多段階に生じていることを確認し、その関係発生の範域を竹鎮集市の市場圏として画定した。本節で婚姻をめぐる空間的ひろがりを検討するに際して、本来的には経済的性格を有す生活空間である市場圏に、市場社会概念に示されたごとく基礎的な社会単位としての性格を認めうるかどうかについても考察してゆく。婚姻は社会の再生産を担うものとして、社会生活に占める意味は大きく、農民も結婚は一生の大事と認識している。婚姻の成立後も妻方の親族との交流は維持される場合が多く、春節の里帰りをはじめとして、相互の

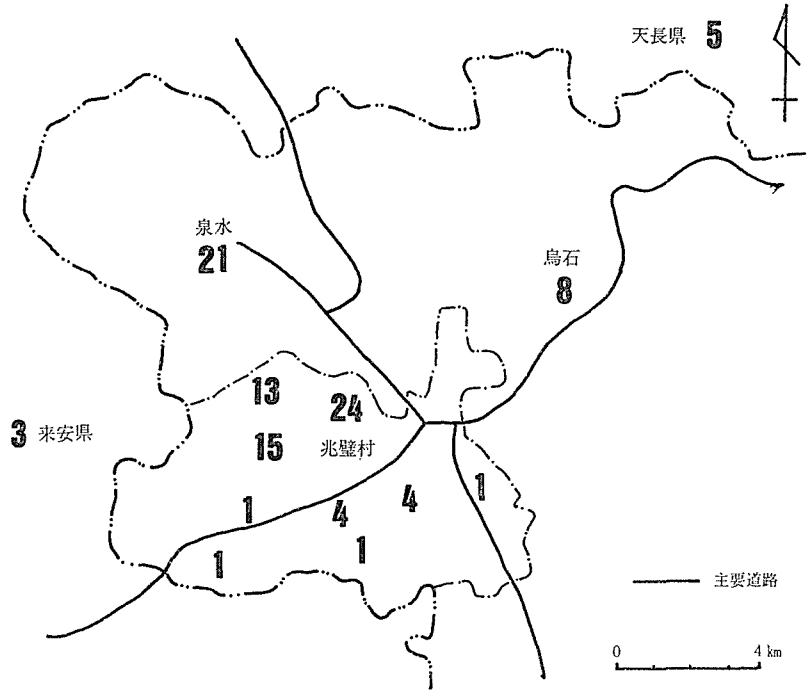

図5　兆璧村の婚入者分布
数値は構成比

行き来が保たれている。この婚姻によって生じた血縁のネットワークは、農村においては一般に小規模な父系集団である宗族のネットワークを補完する機能をもつ。慶弔や家屋の新築には、一時に多くの費用を必要とするが、この資金は宗族と婚姻による血縁関係のなかで調達される傾向が強い。

通婚圏とは、婚姻に伴って生じる居住地移転の範域であり[27]、父系的中国社会においては、一般に女性の嫁入に伴う移動の範域として把握される。ここでは調査地の通婚圏を検討するために、まず、兆璧村の八〇例の婚姻[28]を取り上げる。この八〇例の年齢は二二才から四二才までであるが、全体の七九%が二〇歳代であり、そこに描かれる通婚圏は近年の婚姻によって形成されたものである（図五）。婚姻の空間的ひろがりを幾つかの行政的地域ごとに集計すると、まず同一の村民小組内での婚姻が全体の九%、行政村である兆璧村内での婚姻が二四%、竹鎮鎮域内

での婚姻が六四％となる。日本農村においては、通婚圏の歴史的変化が村内婚から村外婚への拡大と一般化されているように、[38] 婚姻に村落の枠組が大きく影響している。それに比して調査地では、生活空間としての村落にあたる村民小組の内部での婚姻はわずかであり、行政村の内部での婚姻も少ない。すなわち、村落の枠組みを越えて発生するという外向的傾向が婚姻に認められる。兆璧村の村民小組はいずれも複数の姓によって構成される多姓雑居であり、[39] 同族村ではない。中国における宗族は、その内部での婚姻の禁止されている外婚単位であるが、調査地では村落が同族村でないことから、村落レベルでのこの婚姻の少なさが宗族の外婚制に直接規定されたものでないことは明らかである。

この兆璧村の通婚圏を前節で画定した竹鎮集市の市場圏と比較すると、通婚圏は市場圏に内包されるひろがりを持つことが看取される。兆璧村の婚姻八〇例のうち六例だけが市場圏外からの嫁入である。また、竹鎮鎮域内で全体の三分の二の婚姻が結ばれることからも分かるように、通婚圏自体はそれほど広域にわたるものではない。こうした通婚圏の規模は先述の妻方の親族との結婚後の関係の維持を可能にする範域であると言うこともできる。さらに分布の偏倚に注目すると、同一地点への婚姻の集中の傾向と、婚姻の兆璧村より西に多く発生するという方向性が指摘される。[41]

これらの兆璧村の通婚圏の特徴をどのように解釈し得るかについて、沙子崗の農家別調査によって得られた三八例の婚姻に関するデータを、より具体的に婚姻の過程に着目することによって考えてみたい。

まず、婚姻の外向的傾向と村落内での婚姻の少なさを検討する。沙子崗では沙子崗内部での婚姻が二例ある。しかしこの二例はいずれも、一度、沙子崗の外部へ嫁出した女性が夫と共に沙子崗に移住してきたものである。したがって沙子崗内部での婚姻は実質的には存在しないことになる。明確な規範こそ確認できないが、同一村民小組内での婚姻は、配偶者がお互いに知り過ぎていてトラブルが生じやすいとして、農民に消極的に考えられている。外婚制の重要な機能は、外婚集団とその外部の集団との結合が婚姻によって生みだされることであるが、同時に、配偶者の選択を自らの集団の外部で行うことにより集団内での配偶者選択に伴う混乱を回避するという機能も存在する。[42] 調査地域に見られる同一村民小組内

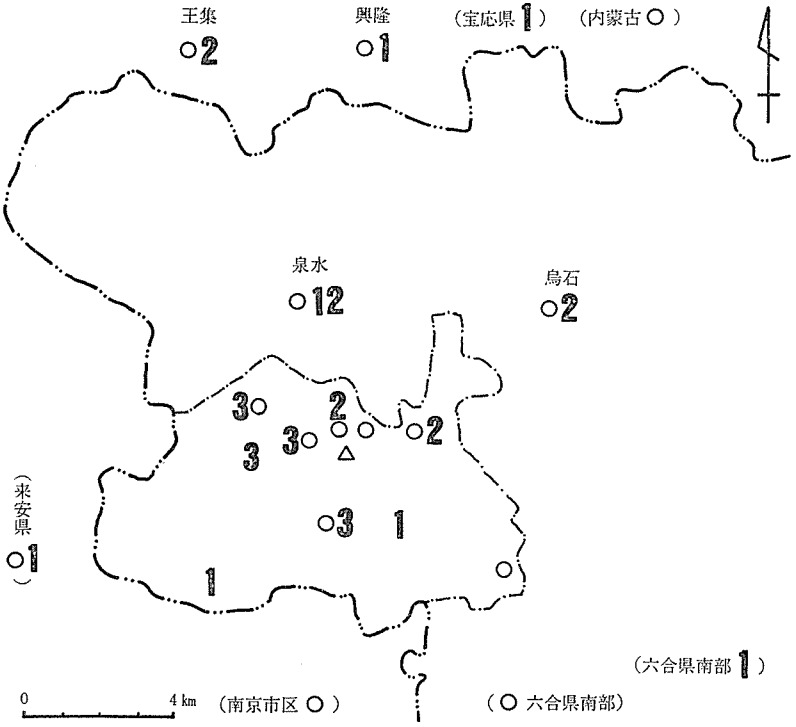

図6　沙子崗の通婚圏と親族分布

△印は沙子崗　○印は親族分布　数値は婚姻数
（ ）内は位置を正しく表していない

の婚姻の少なさには、内部的混乱の回避という外婚制の副次的機能に類似した制約が、村民小組に存在していることが想定される。すなわち、生活空間としての村落は婚姻に関して外婚単位的傾向を持つと考えられる。

次に、通婚圏の全体的範域について、とくに市場圏との関係について検討する。[13] 沙子崗においても市場圏を明らかに越えての婚姻は二例にすぎない。市場圏に通婚圏が内包される状況は、市場社会概念で想定されていた婚姻の市場圏内完結[14]に一致するかに見える。しかし、二つの事象の分布の相関は、事象間の関係を直接証明し得るものではない。[15] ここでは婚姻の過程を検討することによって、市場圏と通婚圏の背後にある事象間の関係を考察する。

中国農村では現在も一般に第三者の紹介に基づいた婚姻が行われており、沙子崗においてもほとんどがこの紹介婚であった。

表3　沙子崗農民の親族と婚姻の分布

宗族名	親族の分布	婚姻の分布
侯	季山村　白羊村　瓜埠郷　(泉水郷) (季山村)(白羊村)〔内蒙〕〔烏石郷〕 〔八里村〕〔井二王〕	大果王　<u>大果王</u>　白羊村 泉水郷　烏石郷　井二王 (泉水郷)(季山村)(白羊村)
王	竹鎮集鎮　大瓘口　程橋郷　大果王 (竹鎮集鎮)〔竹鎮集鎮〕	泉水郷　豊楽村　井二王 季山村　(竹鎮集鎮)
周	八里村　南京市区(宝応県) 〔泉水郷〕	金磁村　<u>季山村</u>　泉水郷 大果王　(宝応県)
余	(泉水郷)	泉水郷　楊雲村　<u>龍袍郷</u> (泉水郷)
趙	泉水郷(泉水郷)〔来安県〕	泉水郷　来安県(泉水郷)

＊　地名末尾に「県・郷」の表示あるものは竹鎮鎮域外,「村」の表示のあるものは竹鎮鎮域内,無表示は兆璧村内
(　)内は戸主妻の実家を示す。〔　〕内は母方の親族を示す。アンダーラインは婚出例

したがって問題となるのは、紹介の過程に、市場社会概念で想定されている、集市を場とした面識の原理が働いているかどうかである。スキナーの報告にあるような、集市にあって、配偶者の紹介を専門的に行う「媒人」は、現在は見られない。紹介という形を取る婚姻の主な担い手である紹介者は、一般に「親戚と近所」とされる。沙子崗の通婚圏の示された図六には、親族の分布も合わせて表示されているが、婚姻の分布と親族の分布に強い相関のあることを、容易に読み取ることができるであろう。[16] さらに、沙子崗に解放前から居住する五宗族について、外戚を含めた、交流の維持されている親族の分布と、婚姻関係を生じた相手方の分布を表したのが表三であるが、そこに見られる親族の分布と婚姻の分布の対応は必ずしも各宗族で完結するものではない。したがって、上述の沙子崗農民の親族と婚姻の分布上の相関の高さは、沙子崗の宗族間で配偶者の紹介が行われることによって生じると考えられる。すなわち、これが「近所」として認識されている部分であろう。数例の具体的聞き取りでは、いずれも沙子崗での親族・近隣と配偶者側での親族・近隣が紹介者となっていた。したがって、この婚姻の過程には、集市の面識が直接的に介在している状況は見いだせないことになる。市場圏と通婚圏の関係は範域の包含関係に止まるもので、[17] 集市と婚姻の事象

間の関係は認められない。

沙子崗の婚姻においても、分布の集中が見られる。とくに泉水郷への集中は、親族の集中的分布と関連を持つと考えられる。こうした集中の背景には、婚姻が婚姻を生む構造が存在する。また、方向的偏倚は沙子崗においても見られ、西方向との婚姻が多い。紹介婚においては配偶者の選択に双方の社会経済的環境の評価が関係する。事例の多くが女性の嫁入であることを勘案すると、前出の図四に見られた竹鎮鎮域内の経済的不均質性、すなわち兆璧村の東に位置する竹鎮集市・集鎮に近いほど経済的に発展しているという状況と関連した、男性側の社会経済環境に対する評価の結果として、女性の西から東へ向かう婚姻の傾向が存在すると見なされる。

婚姻をめぐる空間に関して、社会の再生産圏でもある通婚圏が、紹介婚という婚姻の過程を通して、親族ネットワークの空間的ひろがりと結び付いており、そこでは市場社会概念の想定する定期市介在の原理は認め難いことと、もう一方の紹介者である近隣の集積として、また外婚単位的傾向を持つ範域として、村落が存在することが明らかになった。

① この調査は一九八五年から始められたサンプル調査で、農家の家計状況を知ることが目的のひとつとなっている。六合県では四つの郷鎮からそれぞれ二つの行政村が選ばれ、各行政村の平均的な村民小組から経済状況を考慮して一〇家族が選ばれて、一年間の収入・支出が毎年定点観測的に調査されている。

② 郷鎮企業からの収入は総収入の一〇％となっている。

③ 前掲『中国農村経済学』四一頁

④ この境界は解放後の集団化の過程で形成されたものである。解放前の中国農村において、村境が不明確であったことについては、旗田巍、前掲書（一九七三）とくに第五章参照のこと。

⑤ 村落を集落と耕地のセットとするのは、地理学の共通認識と言えるであろう。その村落の研究方法を示したものとして、応地利明「村落研究の統合的アプローチに関する考察」（『人文地理学の視圏』大明堂、一九八六）

⑥ 領域性とはある主体による範域の設定とその統制の行為を指す。上田元「領域性概念と帰属意識」（『人文地理』三八―三、一九八六）参照のこと。

⑦ 生産責任制の到達点である、生産手段の私有を認めた「大包干」は、一九八三年までに全国的に展開された。『中国農村四十年』（中原農民出版社、一九八九）一三頁

⑧ 一畝は約六・六七アール、一畝は一〇分。

⑨ 経営耕地の分配基準は村民小組ごとに異なる。兆璧村においても、北余では一労働力あたり四畝という基準が、耕地狭小な羊山では人口一人あたり八分という基準が、それぞれ採用されている。

⑩ 各農家は、この「責任田」とよばれる経営耕地のほかに、人民公社時期に設定された狭小な自留地と菜園をもつ。

⑪ 前掲『中国農村経済学』四三頁

⑫ 農民一人あたりの穀物生産とその分配についてみると、次のようになる。調査地域では農民一人あたり約二畝の耕地がある。夏作の水稲の一畝あたり産出量が一〇〇〇斤程度（一斤＝〇・五kg）で、冬作の小麦の一畝あたり産出量が四〇〇斤程度であることから、農民一人あたり約二八〇〇斤の穀物が生産されると考えられる。一畝あたりの請け負い生産量は四二〇斤であり、国家へは一人あたり八四〇斤が納められる。自己消費分がおよそ一〇〇〇斤、家畜飼料が一〇〇斤程度とされる。したがって残りのおよそ八〇〇斤が売却可能部分となる（以上、竹鎮鎮の農業行政担当者の聞き取りによる）。この売却可能部分については、他作物への転換が可能であるが、実際には、調査地では一部に油菜・西瓜などの商品作物が見られるのみで、転換の程度は低い。

⑬ 一農家あたりの労働力は、竹鎮鎮域で一・九六、沙子崗で二・二四である。

⑭ 調査地の耕牛はすべて水牛である。耕牛による耕起・整地は、一頭あたり、三月末から四月初にかけて数日間、六月と九月に二週間づつ行われる。

⑮ 耕牛の所有は親族間で行われるものが多い。八頭中六頭が同一宗族の農家によって所有されている。

⑯ 確認できた中では、一頭が隣接集落の親戚との間で貸借されているのが唯一の例外であった。

⑰ 水利施設の修築は行政村単位でおこなわれており、各農家にその労働力に従って出役が配分されている。水利は竹鎮鎮レベルの管理であり、行政村である兆璧村は行政末端として、その基層を担っている。

このほか、ハイブリッド米の種子や化学肥料の計画供給など、行政システムに組み込まれた農業関連サービスに関しては、行政村の機能が高い。

⑱ データは、前出の「一九八八年六合県農家基本状況調査」を利用した。

⑲ 前掲『中国農民収入研究』三頁。

⑳ 集市と集鎮は、それぞれ定期市と地方町にあたる。竹鎮においては、集市と集鎮が共存しており、集市は集鎮の経済機能を間欠的に高める存在と理解される。

㉑ 化学肥料について、水稲生産に用いられる硫酸アンモニウムについて、計画供給と市場購入の関係について見てみる。一畝あたりの必要量は一二〇斤とされる。このうち八〇斤は計画供給される。すなわち、請け負い耕地一畝あたり八〇斤は、一〇〇斤あたり一四元の統制価格（平価）で政府によって供給される。不足の四〇斤は、一〇〇斤あたり二〇元の市場価格（議価）で農家によって購入される。なお、この二重価格制は計画生産の保証機構の一部を担っていると考えられる。

㉒ 井二王の兆璧村小学校に隣接して開かれている。たばこや文具、駄菓子などの雑貨が売られている。

㉓ 婚礼に際して電気製品が六合県城で購入されたのがわずかな例外のひとつだが、家具・寝具などの婚礼用品もほとんど竹鎮集鎮で購入されている。

㉔ 物品の売買以外に、竹鎮集鎮では、行政・福祉・教育・娯楽などのサービスが享受可能である。テレビが普及（沙子崗で八台）しつつあるために頻度は減ったとされるが、若者を中心に竹鎮集鎮の映画館が利用される。また、竹鎮集鎮の理髪店を利用するものも少なくない。

㉕ 男女共に参集する。年長者の参集頻度はやや低いとされる。

㉖ 調査は集市の参集者二七八例の聞き取りが中心である。サンプル数

の少なさは参集者の属性、特に交易物品に注意することによって補完するよう努めた。

㉗ 現在の市日は、解放前の市日と同一である。人民公社時期に陽暦の五・一〇に市日が変更されたことがあったが、定着しなかった。

㉘ 『中国集市大観』（中南工業大学出版社、一九八八）二〇四―二三三頁の江蘇省大中型集市のデータ（一九八六年又は一九八七年）のうち、市域のものと専門市場を除いた八八例より算出。

㉙ 集市管理部門の推定参集者数。集市の管理は工商管理所が行っており、竹鎮集市には出張所がある。

㉚ 運輸業は現在の農村の重要な非農業的活動であるが、ほとんどがこのトラクターを利用したものである。

㉛ 竹鎮集市の市日が解放前と同一であることから、想定される市日調整も伝統的市システムの中で形成されたと考えられる。

㉜ 石原潤『定期市の研究』（名古屋大学出版会、一九八七）二四―三〇頁

㉝ Skinner, op. cit., p. 33.

㉞ Skinner, op. cit., p. 34. Table 1.

㉟ 階層性を無視して規模のみから考えれば、竹鎮集鎮が中間市場町にあたる可能性は否定できない。しかし竹鎮集市の市場圏内に下位の基層市場町を認め得ない以上、市場圏の大規模性は市場社会概念の検討には大きな制約にはならないと考えられる。

㊱ 一九八八年の竹鎮鎮の農民一人あたりの収入は四六五元である。前述の農家基本状況調査とは集計、算出方法が異なり比較できない。

㊲ 合田栄作『通婚圏』（大明堂、一九七六）一八一頁

㊳ 兆璧村の婚姻については全数データを得ることができず、次善のデータとして「独生子女登記表」を利用した。八〇例すべて嫁入してきた女性である。

㊴ 合田、前掲書、一三八―一四三頁

㊵ 各村民小組ごとの主要な姓は、羊山が湯姓と許姓、東河が趙姓、西河は雑姓、井二王が楊姓、大場口が李姓、南余が石姓、北余が趙姓、西姚が康姓と呉姓と姚姓、東果は雑姓、西果が王姓となっている。各村民小組の主要姓が異なることは各村民小組の独立性を示すとも解釈される。

㊶ 図五において婚姻の比率は、竹鎮鎮域内は行政村ごとに、竹鎮鎮域外は郷あるいは県を単位として集計されている。

㊷ ジョン・ビアッティ著、蒲生正男ほか訳『社会人類学』（社会思想社、一九六八）一五九―一六二頁

㊸ 解放前の中国農村の通婚圏と市場圏の関係を検討した研究として、石田浩、前掲論文（一九八〇）

㊹ Skinner, *op. cit.*, p. 36.

㊺ 鈴木秀夫『風土の構造』（大明堂、一九七五）八六―八九頁

㊻ 図六において婚姻と親族の分布は、兆璧村内は村民小組単位に、竹鎮鎮域内は行政村単位に、竹鎮鎮域外は原則的に郷単位に示されている。

㊼ 通婚圏が市場圏に内包されるという分布上の特徴については、竹鎮集市の市場圏の大規模性が関係していることも見逃せない。

おわりに

社会的諸関係の空間的ひろがりの外延をとらえ、村落社会に代わる社会的基礎単位として市場社会を提示したその立論過程に、市場社会概念あるいは市場圏論の問題点が潜むことは、以上の考察からも明らかであろう。生活空間の重層性を無視して単一の空間的分析枠を追求する陥穽がそこに隠されている。等質地域的性格の強い村落と、本来、機能地域的である市場圏との、生活空間としての相違は、市場社会概念のみでは明確にし得ないのではないだろうか。スキナーの注目した農民間の面識自体にも、フィールドワークによれば、村民小組、行政村、市場圏の各空間スケールに疎密の存在がうかがえるのである。ただし、市場社会の存在そのものを問う考察は本稿の検討範囲を越えており、依然として実証的研究が求められる状況にあるのは言うまでもない。また、市場圏を基礎地域に対するいわゆる二次的な生活空間と位置付ける意図を本稿は持たない。その意味ではむしろ、基礎地域の欠如こそ現代中国農村における生活空間の特徴と言うことができるのではないだろうか。

さらに日本農村に関する生活空間研究の成果に習えば、次の点を無視することはできない。スキナーがフィールドとした四川省の成都近郊は孤立荘宅の広がる典型的な散村地域であり、[1] スキナー自身も調査地の散居的状況を述べている。[2] 村落の機能が強調される日本農村においてでさえ、散村地域の村落には共同体的機能の存在が見いだし難いことを考慮すれば、[3] 村落の意味を低く評価する市場社会概念が散村というフィールドの地域性に規定された側面をもつことも否定できない。すなわち、市場社会概念は、中国農村における一地方モデルとして相対化される可能性を有するのである。もちろんこの点では、本研究も華中農村の地域性に規定されていることは言うまでもない。大規模な集村の卓越する華北農村においては、村落の存在形態ひとつを取っても、村民小組＝生産隊レベルに生活空間としての村落のまとまりを求め得る華中農村とは異なった姿が予想される。地域性をふまえ、中国農村一般を対象とする生活空間研究は、まさに今後の課題とし

て残されているのである。

本稿は、農業生産に見られる家族経営の補完的諸機能や農民と地方町との関係など、個々により詳細な実態的研究を進める価値のあるテーマを敢えて包括的に扱うことによって、中国農村における生活空間の重層性に見通しをつけることを目的のひとつとしてきた。また分析には、原則的に一九八〇年代後半の農村を対象とした静態的アプローチを採用している。本稿の最後に、動態的研究への展望もふくめて、二つの点に言及しておきたい。

狭小な耕地で農業が行われてきた中国農村においては、農業プラスアルファーのプラスアルファー部分が農民の生活にとって重要な位置を占めてきた。[4] 生産責任制の導入以後、このプラスアルファー部分に、集市・集鎮を中心とする局地的再生産圏である市場圏を超出する動きが見られる。農民の非農業的生産活動としては、郷鎮企業の常年雇用労働と建築業などの労務的な臨時雇用労働が主であり、これらの多くは依然として市場圏内で完結しているが、沙子崗の農民には、臨時工として南京や鎮江といった地方大都市へ働きにいっている者も見られる。[5] 商品経済化の進展によって、市場圏の経済的機能が強化されていくと同時に、市場圏を越える、より上位の生活空間の出現をそこに見いだしうると言えよう。

もう一点は、社会政治的空間についてである。その前身の生産隊が所有・経営の主体として強力な作用体であったと考えられるのに対して、[6] 村民小組は生産責任制の導入による所有と経営の分離で経営の大部分が農民へ移行したことにより、領域性は弱体化し、所有は名目化さえしつつあるとされる。[7] こうした生産隊と村民小組の相違は、生産隊長と村民小組長の機能の相違にも現れている。人民公社時期には生産隊が経営主体であったことから、生産隊長は彼の能力が生産の良否に直接つながる重要な役割を担っていたとされる。それに比して現在の村民小組長は末端行政補完的な仕事が中心で、いわばメッセンジャー的な役割に止まる場合が多い。したがって村民小組長の政治力は弱く、村民小組長は一般農民に忌避すべき役職と認識されるに至っている。現在、耕地境界をめぐる紛争や、用水、耕牛の利用に関する揉め事など、同一村民小組内での農民間のトラブルの解決も、しばしば村長をはじめとした行政村幹部が担当している。これら観察された諸

事実は、村民小組の機能的弱体化と行政村の相対的強化が社会政治的空間において生じつつあることを示すと考えられる。

① 金其銘『中国農村聚落地理』（江蘇科学技術出版社、一九八九）二八四頁

② Skinner, *op. cit.*, p. 6.

③ 石原潤「集落形態と村落共同体――特に讃岐の事例を中心に」（『人文地理』一七―一、一九六五）

④ このことは中国農村の前近代における小商品生産の展開に明らかであろう。

⑤ 沙子崗では、南京に三人、鎮江に二人働きに出掛けている。

⑥ 集団化のある時期に、生産隊が境界の明確な範域とその内部の統制という二つの要素を合わせ持つ領域性を有していたことは、中国農村の村落の歴史的展開において重要な意味をもつと考えられる。中兼和津次「中国農業集団化の再検討」（『一橋論叢』九二―二、一九八四）とくに九八―九九頁を参照のこと。

⑦ 王毅「談談明確土地所有権問題」（『学習与思考』一九八八）九一頁、ただし引用頁は『複印報刊資料　農業経済』（一九八九年一月号）

〈謝辞〉 中国政府奨学生としての留学機会を与えてくださった南京大学大地海洋科学系、指導教官として便宜をはかっていただいた崔功豪教授、専門の異なる調査に同行し最善を尽くしていただいた曹栄林先生、大学及び各級政府の外事弁公室そして竹鎮の農民のみなさんの協力があってはじめてこの調査を行うことができた。記して感謝の意を表します。

（京都大学教養部助手　　）

Life Space in Contemporary Rural China: A Case of *Luhe* County, *Jiangsu* Province

by

KOJIMA Yasuo

The concept of marketing community that G. W. Skinner presented in 1964 has been one of the most influential models for studying rural China. The concept treats a marketing area as a basic social unit, though it is not so clear how the concept evaluates the village community subsisting beneath the marketing community. Life space as a spatial base of social life is essentially stratiform. The author pays attention to this stratification, and tries to make clear interrelations between the life space and the social life in contemporary rural China. Data were collected by field work at a rural area in *Luhe* county, *Jiangsu* province from 1988 to 1990. *Luhe* county is an economically middle class rural area in the province. The investigated village where 28 households and 117 people live is a small agglomerated settlement and a multi-lineage village. As a *Cunminxiaozu* it succeeded to a part of former Production Team's territoriality.

Since the responsibility system was executed for agricultural production, strong family farming has prevailed in rural China. The village, however, which is found on *Cunminxiaozu* as a set of settlement and farmland, performs some functions in assisting the family farming. These functions exist because of the dual adjacency of life and production in the village. The social interaction of villagers also extends beyond the village. In many phases of life and production economic connections are observed between villagers and a periodic market or a local town. The marketing area which is a spatial expression of the connection is characterized by its large scale and its inner heterogeneity. Through a spatial examination of marriage, it reveals that the village has an exogamous tendency. And although the marriage area of the village extends to within the marketing area, analyzing the process of marriage, which is generally arranged, the situation supposed in the concept of marketing community, that acquaintances made at the market place directly influence marriage, is not found.